「語意味」と「概念」

伊藤康圓

一般に言語学では、言語を音韻形式と概念との結合体とし、概念を語の意味（意義）と考えるのが今日でも常識のようである。たとえば、金田一京助氏は「ことばの意義は、抽象的な概念にほかならない。それは固有名詞でも、同じことである」として、次のように述べている。

意義には、内包と外延とがあって、馬の意義でいえば、単蹄類であるとか、鬣をもつとか、走ることが早いとかいうようなその特徴の属性がその内包で、凡そ馬と言われる数々の頭数はその外延である。『白い馬』というと、白いという属性が一つ加わる代りに、黒い馬や栗毛馬や斑馬は省かれるからそれだけ外延が減少する（「国語学入門」八〇―八一頁）

以上の説明は「馬」と名づけられる種族に属する「物」（動物）に関する「概念」の説明としては間違ってはいない。が、それを直ちに「馬という語」の意義と考えるのは間違いである。「馬という種族」に対する概念は、その種族についての知識や関心の程度に応じて個人差があるのは当然で、特にその内包は、動物学者と素人とではかなり違うはずである。この場合、動物学者は「馬という種族」について動物学的に詳細な概念をもっているとは言えても、「馬という語」の意義を一般人よりよく知っているとは言えまい。つまり、氏の説を含めて一般の言語理論は「語の意味（意義）」と「種族の概念」とを混同しているのである。

それでは「馬という語」の意味は何かということになるが、この場合・「ウマ」という音韻形式や「馬」という文字は「語」と考えるより、特定の種族の「名」と考えた方が妥当であろう。動詞の名詞形や複合語を除けば本来の名詞の大半はこの種の「名」なのである。すべての名に言えることだが、馬という「名」は、他の語と結合して用いられる場合は、「馬という名の種族に属するもの」という意味になる。（「馬という……もの」という連語の場合は、全体の意味は同じでも、内部の意味形式や主体の意味作用が違ってくる。）

したがって、「白い馬」という連語の意味は「白い（と意識した）馬（という種族に属するもの）」となる。決して「白いという属性が一つ加わる代りに」「それだけ外延が減少する」のではない。「馬という種族に属するもの」という意味よりも「白い馬」という連語の意味の方が「白い」という語意味が加わった分だけ、その適用範囲が減るだけのことである。談話の中では「馬」という名で特定の馬を指すこともできるが、「あらゆる馬」という連語では、それは不可能である。が、それはこの違いがあくまでも両者の意味の違いによるのであって、内包と外延の違いのため

ではないからである。

一般に種族（種類）のカテゴリーの抽象度が高まるほど、その種族に共通の属性は限定されてくる。その抽象の段階のある時点で、ある種族に共通のすべての属性が「物」としての具象性を失い、観念に近い抽象的表象と化したとき、それは極度に「語の意味」に近接し、したがって、その種族の「名」は殆ど「語」と等質のものとなる。（例「魚」「木」「花」など）種族の中には、名そのものが複合語の形をとるものが多いが、その中の抽象度の高い種族で、「名として用いられる語の意味」と「種族の属性」とが殆ど完全に一致するもの（例「生物」「食べ物」）は、「名」であると共に「語」である。それらの「複合語」に対応する「もの」は、それらによって名づけられる一定の種族に属する「もの」であると共に、それらの「語意味」によって意味づけられる「もの」なのである。これに対して、より抽象度の低い種族では、複合語の形の名の「語意味」は、その種族の属性のほんの一端を表示するだけである。

われわれは対象（事物や現象）の性質や、主体から見ての価値や用途などについて、それぞれに共通の特徴を意識するが、㈠そうして意識した一定の特徴の表象の型（意識の型）や、㈡主体の意識の型を、一定の社会（国）の言語の習慣に従って、一定の音韻形式で表示する。こうした習慣によって用いられる音韻形式が「語」であり、それに対応する「意識の型」が「語意味」なのである。「語」にはこのほかに、主体の意識作用（助詞・助動詞など）や主体の指示作用（代名詞・連体詞）を表示するものがあるが、これらの「語」では、主体の「意識作用」や「指示作用」自体が「語意味」なのである。

時枝誠記氏は「言語の意味」と「概念」とが別のものであることを指摘して「意味はその様な内容的な素材的なものではなくして、素材に対する言語主体の把握の仕方である」（「国語学原論」四〇四頁）と述べているが、主体が素材を何によって把握するかという肝心な点には一言も触れていない。が、この場合、主体が素材を把握するには、「語意味」によるしかないことは明らかである。氏はせっかく「言語の意味」と「概念」とを混同した一般の言語理論を否定しながら、そのために、「語意味」の存在まで否定してしまったのである。

前に述べた語意味の中の「意識の型」には、㈠対象を意味づけるもの（名詞）、㈡動作や状態を意味づけるもの（動詞）、㈢対象に関する主体の意識の型を表示するもの、㈣主体の意識の型自体を表示するもの（以上「形容詞」「副詞」など）があるが、これらの意識の型の適用範囲（右の㈠の場合は、それによって意味づけ得る対象一般。㈡は動作や状態一般。㈢㈣はその意識の型に該当する主体の意識一般。）を外延とし、それぞれの「意識の型」を内包と考えることによって、両者の関係を「概念」としてとらえることができる（これを「語の概念」と仮称する。）「種族の概念」は、一定の種族に属する「もの一般」を外延とし、その種族に共通の属性を内包とするから、これとは全く異質のものである。これまでの言語学で混同されていたこの二種類の概念をはっきり区別することが、言語を深く考究するためには必要なのである。